

2025 年度 核融合科学研究所 第 14 回 ITER 国際スクール参加支援
実施報告書

IIS2025 参加支援			
参加者	所属機関： [REDACTED]	職名・学年： 博士前期課程 2 年	氏名： 可児和寿
参加者連絡先	電話： [REDACTED]	E-mail： [REDACTED]	
派遣期間	2025 年 6 月 28 日 ～ 2025 年 7 月 6 日（9 日間）		
得られた成果等 （行数は適宜増やしてください）	<p>1. 本スクールでの印象に残った講義やイベント等 今回の ITER スクールで最も印象に残ったイベントはなんと言ってもやはり”ITER 見学（Visit ITER）”である。見学時に撮影した写真を図 1 に示す。実際にトカマク建屋に入って据え付けられた本体のモジュールを見学し、隣の建屋で組立途中のモジュールを見学することができたというのは非常に印象に残っている。見学したタイミングでは、モジュールが 2 つ取り付けられた状態で、1 つのモジュールが組立中であった。ITER の建設状況などについては ITER 機構の Instagram などの SNS や学会をはじめとする様々な場において知る機会は多くあったが、説明を受けながら実際に実物を見ると印象の残り方が違った。まさに ”百聞は一見に如かず” である。これまで知識として蓄えてきた ITER の姿が、この見学を通して、リアルな実感へと変わった。非常に貴重な機会をいただいたと感じている。また、自分の身の回りにある核融合・プラズマに関する装置は小型なものばかりであるため、実際の核融合炉がどれほどの大きさであるか身をもって体験し、自分が如何に壮大な研究・プロジェクトの一部に携わることができているかを再確認することができた。</p>  <p>図 1. 実際に見学した ITER 本体</p>		
	<p>2. 本スクールに参加して新たに得られた知見や技能等 ITER 国際スクールにおいては特に、自身が主に研究対象としていない領域についての知見を多く得ることができたと感じている。自分は基本的にトカマクの炉心プラズマ、特にプラズマの加熱等に関する内容を主に研究・学修している。そのため、それ以外の内容について大枠は知っていてもあまり深く学習する機会はなかった。今回のスクールでは核融合に関する内容について幅広く、“統合モデリング”という共通の観点から講義が行われたため、普段自分では学修しない範囲について知識を得ることができた。これにより、炉心プラズマ（加熱や MHD など）、SOL、第一壁との相互作用といった各分野が、それぞれ独立したパーツではなく、核融合炉という 1 つの巨大で複雑なシステムを構成する、不可分な要素であることを再認識することができた。また、核融合プラズマの統合モデリングシミュレーションにおいて用いられている機械学習などの最先端な話も聞き、知見を深めることができた。知識的な面だけでなく、英語に関しても学ぶことは多くあった。普段の研究生活では日本語で表現することが主であったため、講義や他の参加者が行うポスター発表を聞く中で、実験結果の表現方法など始めて見る英語の使い方・表現の仕方について触れることができ、それもまた大きな学びとなった。</p>		

※ 次頁に続きます。

	<p>3. 他国の参加者との交流状況について</p> <p>各講義の間の休憩時間（コーヒープレイク）や昼食時を通して様々な国からの参加者とコミュニケーションをとった。最初の方はなかなか自分から話しかけに行けず、話しかけられ待ちになることが多かったが、徐々に自分から話しかけることができるようになった。特に、バンケット（夕食会）で同じ卓で食事をした参加者の方々とよく話すようになり最終日には連絡先も交換し、帰国後も時々連絡を取っている。</p> <p>他国の参加者との会話では、各々の研究についての話な勿論だが、それだけでなく、それぞれの出身国の食事や文化から、政治やエネルギー問題など幅広いトピックスについて様々な話をした。共通して感じたこととしては、日本の文化について非常に興味を持って貰えているということである。特にアニメに関しての知識は凄まじく、自分よりも日本のアニメについて知っている人が多く驚いた。また、昨年度の ITER 国際スクールが名古屋で行われたこともあり（自分は参加することができなかったが）、昨年の ITER スクールにも参加した方々とは名古屋のココ行った！やコレ食べた！という話を多くし、名古屋出身の自分にとっては良い会話の種があり助けられたと感じた。</p> <p>4. 自分自身の今後の研究・職務等への効果について</p> <p>今回のスクール参加によって自分自身に対して与えた影響として、真っ先に挙げられるのはモチベーションの大幅な増加である。参加者の大半が博士課程（PhD）の学生であり、未だ修士課程で進学を希望しているが周りに博士学生が少ない自分にとっては、各国の博士学生との会話やポスター発表を聞くことで、その凄さを体感し、数年後には自分もそれ以上の成果を挙げ発表できるようになりたいという大きなモチベーションが生まれた。</p> <p>モチベーションの増加だけでなく、自身の研究そのものに対しても良い効果があった。スクール内で行ったポスター発表を通して、自身の研究に対して大きな影響があった。自分のポスター発表を聞きに来てくれた方々からこうしたらどうかなどのアドバイスを貰ったりしたことで、今後の研究展開について新たな内容が生まれ、より良いものになっていくと感じた。</p> <p>5. その他、特筆すべき事項、重要な課題、スクールの感想、事業への要望等</p> <p>今回の ITER 国際スクール参加に際して多大なご支援をいただき、ありがとうございました。このご支援がなければ、これほど充実した学びの機会を得ることは叶いませんでした。心より感謝申し上げます。今回の経験は、私の研究者人生における大きなターニングポイントになったと将来言うことができるよう、いただいたこの貴重な機会を決して無駄にすることなく、ここで得た学びと感動を原動力とし、より一層精進してまいります。</p>
備考	